

# Tb4

31  
MARCH  
2008

## Distribution survey report of the Tonami city vol.4

砺波市遺跡詳細分布調査報告4

— 油田・南般若・庄下 —

2008年3月

富山県 砧波市教育委員会

## 序

砺波市は、富山県西部の砺波平野のほぼ中央部、大部分が庄川により形成された扇状地上に位置しています。将来の都市像を「庄川と散居に広がる健康新ラーネ都市」とし、まちづくりの基本理念を「花香り、水清く、風さわやかなまち 砧波」と定め、文化遺産である散村の保護・活用を図るとともに花・水・風をキーワードに自然との調和をもとめ、住民が安心して暮らせる住みよい都市をめざしています。

砺波市では、これまでに旧砺波市域全体を対象とした遺跡詳細分布調査は実施されておらず、平野部の大半が遺跡の希薄な地帯という印象を与えます。これまで偶発的な発見や地域的に特定種別の遺跡の表面調査はなされてきましたが、少ない情報をもとに地域の歴史的環境を語ることはできません。

また、砺波市は近年人口増加とともに開発行為が頻発しており、埋蔵文化財保護の必要性が日々強くなっています。現状のままでは埋蔵文化財行政を運営する上で弊害となりかねません。

旧庄川町では、すでに平成14年度から2カ年をかけて町内遺跡詳細分布調査が実施され、報告書が刊行されています。

そこで、国庫補助事業として7カ年計画で旧砺波市全域を対象とした遺跡詳細分布調査を実施する運びとなりました。

本分布調査の成果をまとめた本書が砺波市の地域史研究ならびに埋蔵文化財保護体制確立の一助となることを願ってやみません。

おわりに、調査の実施および報告書刊行にあたり、油田・南般若・庄下地区各自治振興会および砺波市土地改良区、富山県埋蔵文化財センターをはじめ関係各位に多大なるご援助・ご協力をいただきました。衷心より感謝申し上げます。

平成20年3月

砺波市教育委員会  
教育長 堀田良男

## 例　言

1. 本書は、砺波市教育委員会が国庫補助を受けて 7 カ年計画で実施している市内遺跡詳細分布調査事業の 4 年目（2007 年度）の分布調査報告である。
2. 調査は、砺波市教育委員会が主体となり実施した。
3. 今年度調査は、砺波市油田・南般若・庄下地区を対象とした。調査期間は次のとおりである。

現地調査 平成 19 年（2007）11 月 5 日～平成 19 年 11 月 16 日

整理作業 平成 19 年（2007）11 月 17 日～平成 20 年 3 月 26 日

4. 調査事務局は、砺波市教育委員会生涯学習課に置き、学芸員野原大輔が調査事務を担当し、教育次長戸田保が総括した。

調査事務局 砧波市教育委員会 教育次長 戸田 保

生涯学習課 課 長 清澤 康夫

同 主 幹 銀田 忠夫（文化芸術係長兼務）

調査担当者 同 学芸員 野原 大輔

5. 現地調査にあたって、油田・南般若・庄下地区的各自治振興会に多くなご協力・ご理解を得た。
6. 現地調査は、株式会社アーキジオに委託して実施した。
7. 資料の整理、本書の編集・執筆は、調査担当者が行なった。また、遺物整理・図面作成には、千田友子（生涯学習課）が参加した。
8. 採集遺物および記録資料は、砺波市教育委員会が保管している。

## 目 次

### 序 文 例 言 目 次

<b>第 1 章 調査の沿革</b>	<b>1</b>
1 地理的環境と遺跡の分布	1
2 調査に至る経緯	4
3 分布調査の年度計画	4
4 分布調査の方法	5
<b>第 2 章 調査の成果</b>	<b>9</b>
1 平成19年度調査区の概要	9
2 採集遺物	11
3 遺跡各説	17
秋元窪田島遺跡、千代遺跡、木下遺跡、油田大坪遺跡 堀内遺跡、宮村遺跡、中村イシナダ東遺跡、 中村イシナダ遺跡、高道遺跡、花総合センター内遺跡、 庄下館跡、大門遺跡、八咫壇神社遺跡、高道向島遺跡、 高道大島遺跡	
<b>第 3 章 まとめ</b>	<b>23</b>
 <b>【参考文献】</b>	

## 表 目 次

- Tab.1 遺跡数の推移
- Tab.2 分布調査の年次計画
- Tab.3 出土遺物観察表
- Tab.4 中世石造物一覧
- Tab.5 採集遺物一覧（1）
- Tab.6 採集遺物一覧（2）
- Tab.7 調査遺跡一覧

## 図 版 目 次

- Fig.1 研波平野の地形分類図
- Fig.2 埋蔵文化財包蔵地と地形分類図
- Fig.3 塊状耳飾
- Fig.4 踏査経路模式図
- Fig.5 研波市分布調査範囲図
- Fig.6 調査区周辺の旧版地図
- Fig.7 採集遺物の時期別点数
- Fig.8 遺物実測図
- Fig.9 埋蔵文化財包蔵地と遺物採集地点

## 写 真 図 版 目 次

- PL.1 空中写真（1）
- PL.2 空中写真（2）
- PL.3 調査写真（1）
- PL.4 調査写真（2）
- PL.5 調査写真（3）
- PL.6 調査写真（4）
- PL.7 調査写真（5）
- PL.8 遺物写真（1）
- PL.9 遺物写真（2）
- PL.10 遺物写真（3）
- PL.11 遺物写真（4）
- PL.12 遺物写真（5）

# 第1章 調査の沿革

## 1 地理的環境と遺跡の分布

**庄川扇状地** 研波市は大部分が東部を北流する庄川により形成された扇状地であり、東に旧扇状地右肩の芹谷野段丘、そして射水丘陵から連なる東別所新山山地を控える。庄川扇状地は県内の三大扇状地に数えられ、そのなかでも最大の規模を誇り、面積は 146 km<sup>2</sup> に及ぶ。庄川扇状地には、地理学上著名的な散村 (Dispersed Settlement) が広がっており、長閑な田園空間を形成している。

庄川はかつて幾度となく河川変遷を繰り返し、近世に至り現河道に落ちていた経緯がある。天正 13 年 (1585) の大地震によって、庄川町雄神橋付近の弁財天社辺りを千保川・中田川に分流された。現在の庄川が主流になるのは、近世初頭の承応年間 (1652 ~ 1655) 頃の柳瀬普請、続く寛文 10 年 (1670) にはじまる上流の松川除築堤工事を経てのことである。

氾濫原であった平野部は、旧河道が幾条もあり、地形の小起伏が多い。そのため遺跡の希薄な地帯として知られ、遺跡全体の 30% に過ぎない。縄文遺跡の分布は、扇頂部に中期中葉の拠点集落・松原遺跡があるが、段丘崖の東保石坂遺跡、徳万遺跡、扇央部の久泉遺跡などが散在する状況である。

弥生・古墳時代は社会基盤が稲作に移行し、生活圏が湧水帯に移動したため、集落は未発見である。わずかに平野東部の低位段丘上にある安川野武士 A 遺跡で弥生土器が採集されている。

**東大寺領莊園** 奈良時代になると 8 世紀中頃に東大寺領莊園が成立し、平野東部を中心に扇央部まで遺跡の分布域が拡大する。莊園本拠に近い久泉遺跡、秋元窪田島遺跡、徳万傾成遺跡、扇央部には小杉遺跡、千代遺跡、高道向島遺跡、宮村遺跡などが展開し、いずれの遺跡も地理学上でいう“マッド”(mud) 上に存在する。マッドは微高地・自然堤防上に発達した黒色有機質土の堆積域であり、河川氾濫の影響の少ない比較的安定した地形といえる。

**般若野莊** 中世になると東大寺領莊園の範囲を踏襲して徳大寺家領般若野莊が成立 (12 世紀中頃か) し、扇央部には油田条 (村) が文献にみえる。般若野莊では領家の支配領域と目される位置に東保遺跡 (東保高池遺跡)、東保般若堂遺跡があり、周辺に秋元窪田島遺跡、久泉遺跡などがある。

**芹谷野段丘** 庄川の右岸には台地がひろがり、河川作用によって形成された河成 (河岸) 段丘が存在している。それらは低位段丘、中位段丘、高位段丘として分類することができる。庄川町庄から宮森までは低位段丘が存在しており、隆起扇状



Fig.1 研波平野の地形分類図 (神島利夫 1982)

地堆積物が形成されている。高位段丘にあたる芹谷野段丘（福岡段丘）は、旧扇状地の右扇の一部が残存し段丘となったものである。南は安川付近から北は大門町串田付近まで約10kmに広がり、福岡の嚴照寺周辺では海拔80mを測る。芹谷野段丘上は、近世に庄川から芹谷野用水が引かれ、集落が展開した。

**厳照寺遺跡** 段丘縁辺部から丘陵裾にかけて縄文期の遺跡が多く、嚴照寺遺跡、高沢島Ⅰ遺跡、高沢島Ⅱ遺跡、宮森新北島Ⅰ遺跡、上和田遺跡などが存在する。嚴照寺遺跡は栴檀野窯圃場整備事業に先立ち昭和50・51年に富山県によって調査が実施されている。堅穴住居跡11棟、埋表1箇所、穴などが検出され、中期前葉の典型的な弧状集落であることが判明した。出土土器群は、「嚴照寺Ⅰ式・Ⅱ式・Ⅲ式」として中期前葉の地域的な編年を確立した。

弥生時代は増山城跡で土器片が発見されており、古墳時代は高沢島Ⅲ遺跡で遺物包含層中から土師器を数点検出している。

**栴檀野窯群** 奈良時代になると東大寺領花園に近接することから、須恵器の一生産地となる。段丘・丘陵一帯にある須恵器窯を総じて栴檀野窯跡群と呼び、南北約2.0kmの範囲に窯が点在し、南の福山支群・北の増山支群に分けられる。増山支群の宮森窯と福山支群の安川天皇窯が最も古く8世紀第2四半期から中葉に位置付けられ、8世紀第3四半期から第4四半期にかけて増山支群の増山龜田窯、増山团子地窯、増山妙覺寺坂窯が操業を始め、同時期には福山支群で福山窯、福山小堤窯、福山大堤窯が操業している。9世紀前半に入ると、小丸山1号窯・2号窯が操業され、9世紀後半から10世紀にかけて正権寺後島窯、増山外貝喰山窯、増山筆山窯、東筆鎌野鐘が操業をし、以後栴檀野窯跡群では須恵器生産が衰退する。

**庄東山地** 芹谷野段丘の東、和田川の両岸には中位段丘が形成されており、和田川流域段丘帯をなしている。和田川は、牛岳の北西側山中に源を発し、庄東山地と芹谷野段丘の間を大きく蛇行し、池原付近で坪野川が合流する。流路延長23.5km、庄川の支流である。昭和43年、和田川総合開発事業により和田川ダムが竣工、和田川は堰き止められて増山湖ができる。

和田川の右岸は、一般に庄東山地（音川山地）と呼称される範囲に含むことができ、富山県を東西に分断する射水丘陵帶の一枝群を成している。この山地は起伏量が少ない丘陵性小起伏山地であり、地質的には青井谷シルト質泥岩層の範囲に含まれる。南に位置する山地は標高200m余りを最高点として100m余りの小起伏山地で構成されている。この山地の西北に位置する天狗山（標高192m）の北斜面、県民公園頬成の森の緩斜面丘陵は、南側山地からのかつての扇状地性堆積層で構成されている。表層地質としては、砂岩を主体とする下部と無層理青灰色泥岩を主体とする上部から成っている。

**増山城跡** 和田川右岸の丘陵上には、越中三火山城のひとつに数えられる増山城跡がある。南北朝時代の二宮円阿軍忠状に「和田城」という城名がみえ、亀山城に比定する見方がある。室町時代から放生津城を本拠とする神保氏の支城となり、天正4年（1576）に上杉謙信に攻略され落城し、天正9年（1581）に織田方に焼き払われた。天正11年（1583）以降、越中統一を果した佐々成政の西の拠点となり、のちに前田方の手に渡り、城の守将となつた中川光重が退老もしくは没した慶長年間まで存続したとされる。また、左岸には城下にあたる増山遺跡（増山城下町遺跡）が広がっている。

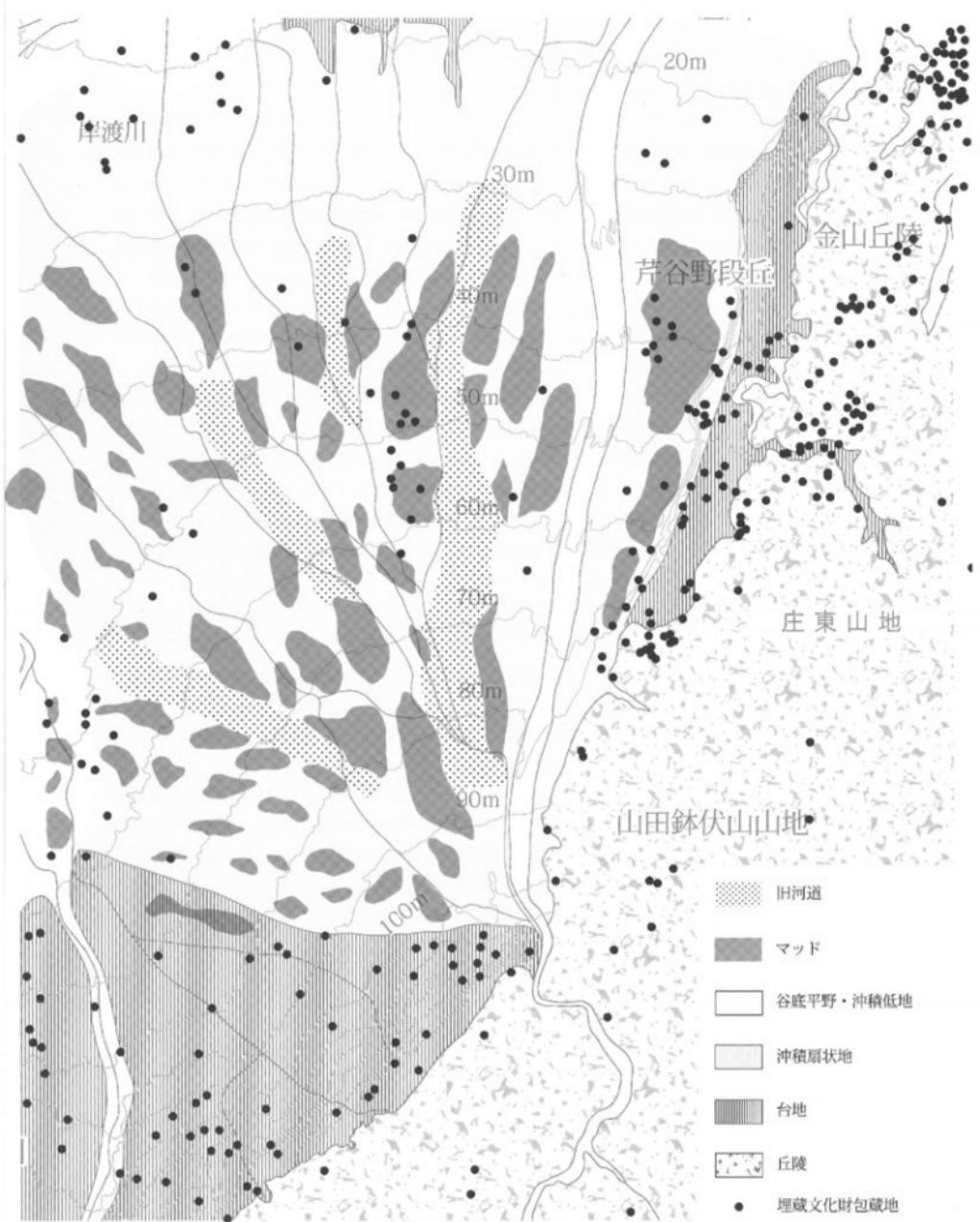


Fig.2 埋蔵文化財包蔵地と地形分類図 (Scale=1 / 75,000)

## 2 調査に至る経緯

**沿革** 遺跡地図は、埋蔵文化財の保護・周知化を目的として、これまで作成されてきた。砺波市内の遺跡は、1974年発行の『全国遺跡地図 富山県』ではわずか34遺跡しか確認されていないが、1993年に富山県埋蔵文化財センター発行の『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』では112遺跡に急増している。昭和40年代からの高度経済成長に伴う開発増加、そして全国的な埋蔵文化財保護の気運高揚に起因する。その後『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』を基に加除修正を行っており、現在まで159遺跡を確認している。インターネットを核とする情報化社会への移行に伴い、富山県では平成16年度に「富山県GISサイト」(<http://wwwgis.pref.toyama.jp>)を開設し、最新の埋蔵文化財包蔵地図を広く県民へ周知すべく環境を整えた。

これまでIH砺波市では、旧市内全域を対象とした遺跡詳細分布調査が行われておらず、土木工事による偶発的な発見や市民からの届出、国道敷設等の大規模事業に伴う分布調査等により埋蔵文化財包蔵地の把握に努めてきた。このようにして設定された範囲は決して精度の高いものとは言えず、開発照会がある度に事業用地を踏査してきた。開発行為等の事前協議を進める上で精度の高い遺跡地図は必要不可欠であり、埋蔵文化財の保護・活用の観点からも遺跡地図の充実は急務である。また遺跡の分布状況は、考古学研究の基礎資料である。以上の事由から、遺跡詳細分布調査を実施する運びとなった。

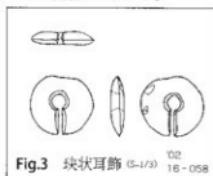
Tab.1 遺跡数の推移

遺跡数			発行機関	発行年	図名
砺波市	IH砺波市	旧庄川町			
30	24	6	文化財保護委員会	1965	『全国遺跡地図(富山県)』
35	29	6	富山県教育委員会	1972	『富山県遺跡地図』
34	29	5	文化庁文化財保護部	1974	『全国遺跡地図 富山県』
112	98	14	富山県埋蔵文化財センター	1993	『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』

**旧庄川町の分布調査** 旧庄川町では岡席補助を受け、合併前の平成14～16年度の3ヵ年で町内遺跡詳細分布調査を実施している<sup>1)</sup>(現地調査2年、報告書1年)。町内を4地域に分割し、開発が予想される平野部に重点を置き調査が行われ、13遺跡の新規発見と2遺跡の台帳内容変更がなされた。採集遺物は463点を数え、約半数が庄川左岸の段丘上に分布することを把握している。

著名的な金屋ポンポン野遺跡付近で縄文時代前期後葉・蟻ヶ森II式期の块状耳飾(蛇紋岩製)を1点採集している。

1) 庄川町教育委員会 2004 『富山県庄川町埋蔵文化財分布調査報告』



## 3 分布調査の計画

旧庄川町域を除く市内全域(96.33km<sup>2</sup>)を対象として、現地踏査を7ヵ年計画で実施する予定である(右表参照)。旧砺波市には、計17地区あり、踏査可能面積を考慮し各年度2～3地区ごとに調査を実施することにした。調査地区的設定は、開発行為が多く、埋蔵文化財包蔵地が希薄な地区を先行し、旧砺波市域の南西から北西部、中央部を縦断し庄川を越えて東部、段丘上・山間部という計画を策定した。

Tab.2 分布調査の年次計画

調査年度	年次	調査地区	面積 (km <sup>2</sup> )
平成 16 年度 (2004)	1 年次	鳶栖、東野尻、五鹿原	14.43
平成 17 年度 (2005)	2 年次	出町、若林	9.26
平成 18 年度 (2006)	3 年次	林、高波	10.88
平成 19 年度 (2007)	4 年次	庄下、油田、南般若	11.08
平成 20 年度 (2008)	5 年次	柳瀬、太田、中野	13.22
平成 21 年度 (2009)	6 年次	般若、東般若	13.53
平成 22 年度 (2010)	7 年次	梅嶺野、梅嶺山	23.91
			96.33

## 4 分布調査の方法

**踏査の方法** 考古学的調査として、地表面の踏査を行い遺物採集に努め、遺構・遺物の広がりや分布状況を把握する手がかりとした。砺波市の平野部は大部分が庄川扇状地によって形成され、大小河川の氾濫が現在の地形状況を生んでおり、古代以前の遺跡立地に大きく反映するという特性がある。遺跡分布と地形状況は表裏一体の関係にあるといつても過言ではない。しかし、旧砺波市では昭和 30 年代後半から県内に先駆けて大規模な圃場整備が行われており、本年度調査区もすでに整備完工されている。かつての景観は失われ、本来の地形的微起伏を確認することはできない。同時に多くの遺跡も保存されることなく破壊された可能性が高い。

そこで、近年の地形変化とこれまでの踏査経験から、遺物の表面採集自体が困難と予想されるため、「なるべく多くの目で多くの遺物を採集すること」と調査の迅速化を目的として、富山大学考古学研究室の院生・学生の協力を得て、下の模式図のように踏査経路をとることにした。扇状地上の圃場整備後の水田は、大型機械導入のため 1 区画 30 a (短辺 30 ~ 40 m × 長辺 100m) の規格を持ち、水廻り効率から短辺が磁北 (流路方向) もしくは南東→西北に設定されている。1 班 5 名の体制で 1 区画の踏査にあたり、横並びに短辺方向に沿って歩くことを基本とした。水田畦畔には積年の耕作の結果、遺物が集在する可能性が高いことから、各調査員はできる限り畦畔を踏査経路に組み入れることに努めた。

**遺物の扱い** 採集遺物は番号を振り、洗浄・注記・接合・実測作業を行った。注記表現は、「砺波市分布調査 4 年次(Tonamishi-Bunputyosa 4)」から、「TB - 4」とした。現地踏査では、携帯が簡便なゼンリン住宅地図 2000 (株式会社ゼンリン北陸) にその場でプロットし、踏査後に砺波市都市計画図 (1/2500) に写した。遺物は、班ごとに番号を振り、全体の踏査完了後、すべての遺物に通し番号を付した。大半の遺物が細片であるため、実測可能な個体を選別して図化している。

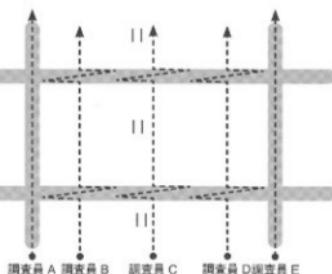


Fig.4 踏査経路模式図

## 包 藏 地 の 認 定 等の諸要素を考慮する必要がある。

平成 10 年 6 月に報告された「埋蔵文化財の把握から開発事業の発掘調査に至るまでの取り扱いについて」の中で法律上の保護対象となる「周知の埋蔵文化財包蔵地」は試掘・確認調査その他の発掘調査等の成果に基づき高い精度で把握・決定されることが必要であるとされており、その方法として、遺物の散布状況や地形の観察、地形・地質の形成過程を踏まえ、各時代の生活・生業に適した立地の想定、地形図・空中写真・地籍図・絵図等の資料等の総合的な活用が挙げられている。

実際に岐阜県大垣市教育委員会では、平成元年から平成 8 年度までに実施された分布調査において、踏査を主とする考古学的調査だけではなく、「時代ごとの地形復元図を作成する自然地理学的調査、絵図や地籍図（字絵図）から地表面下の痕跡を推定する歴史地理学的調査、そして低地での発掘ではまず最初に出会う掘潰れ等の輪中景観を復元する人文地理学的調査」といった地理学的手法を援用し、遺跡推定の検討材料としている<sup>1</sup>。市域の大半が扇状地であり、「沖積地での踏査の困難さ」を指摘される点など、当市と非常に素地は似ている。大垣市教育委員会の分布調査手法は理想形とも言うべき取り組み方であるが、諸般の事情から当市で同じ手法を採用することは難しい。少しでも理想に近づけるため、当市では以下の手法を探り、埋没遺跡の範囲決定の手がかりとした。

- 1) 考古学的調査（踏査）
- 2) 歴史地理学的調査（旧字界・字名図作成）
- 3) 自然地理学的調査（従前図判読、地形分類調査）

考古学的調査の方法は、先述のとおりである。旧字名・字界図は、主に砺波郷土資料館蔵の字絵図や『砺波市史 資料編 5 集落』<sup>2</sup>から字名・字界を抽出し、旧地形図（昭和 30 年代砺波市作図）・現況地形図（平成 5 年砺波市作図）に情報を入力、必要に応じ識者から聞き取り調査を行った。

また、自然地理学的調査では、土地改良区に保管されている圃場整備前の従前図を収集し、失われた地形状況の復元を試みた。現況での地形確認が難しいため、旧地形を把握するには従前図を活用することが有効である。圃場整備前の空中写真から旧地形図・等高線図を作成することは技術的に可能であるが、費用的問題から断念した。従前図は、公園を基に作られているものや現地測量が行われているものなど精度にばらつきはあるが、基本的に縮尺が 1/500 もしくは 1/1000 であるため、空中写真よりはるかに現況図面との整合が容易である。ただし、圃場整備が行われた全地区に従前図が作成・保管されていない難点もある。

地形分類調査は、『土地分類基本調査 城端』（富山県 1981）をはじめとする地形分類図・表層地質図に掲っている。また、マッドと呼ばれる黒土層について、外山秀一氏の論文「プラント・オパールからみた砺波平野の土地利用と黒土層の特性」<sup>3</sup>を参考としている。

1 岐阜県大垣市教育委員会文化部 1997 『大垣市遺跡詳細分布調査報告書-解説編-』

2 砧波市史編纂委員会 1996 『砺波市史 資料編 5 集落』

3 外山秀一 1997 「プラント・オパールからみた砺波平野の土地利用と黒土層の特性」『砺波散村地域研究所研究紀要第 13 号』砺波市立砺波散村地域研究所

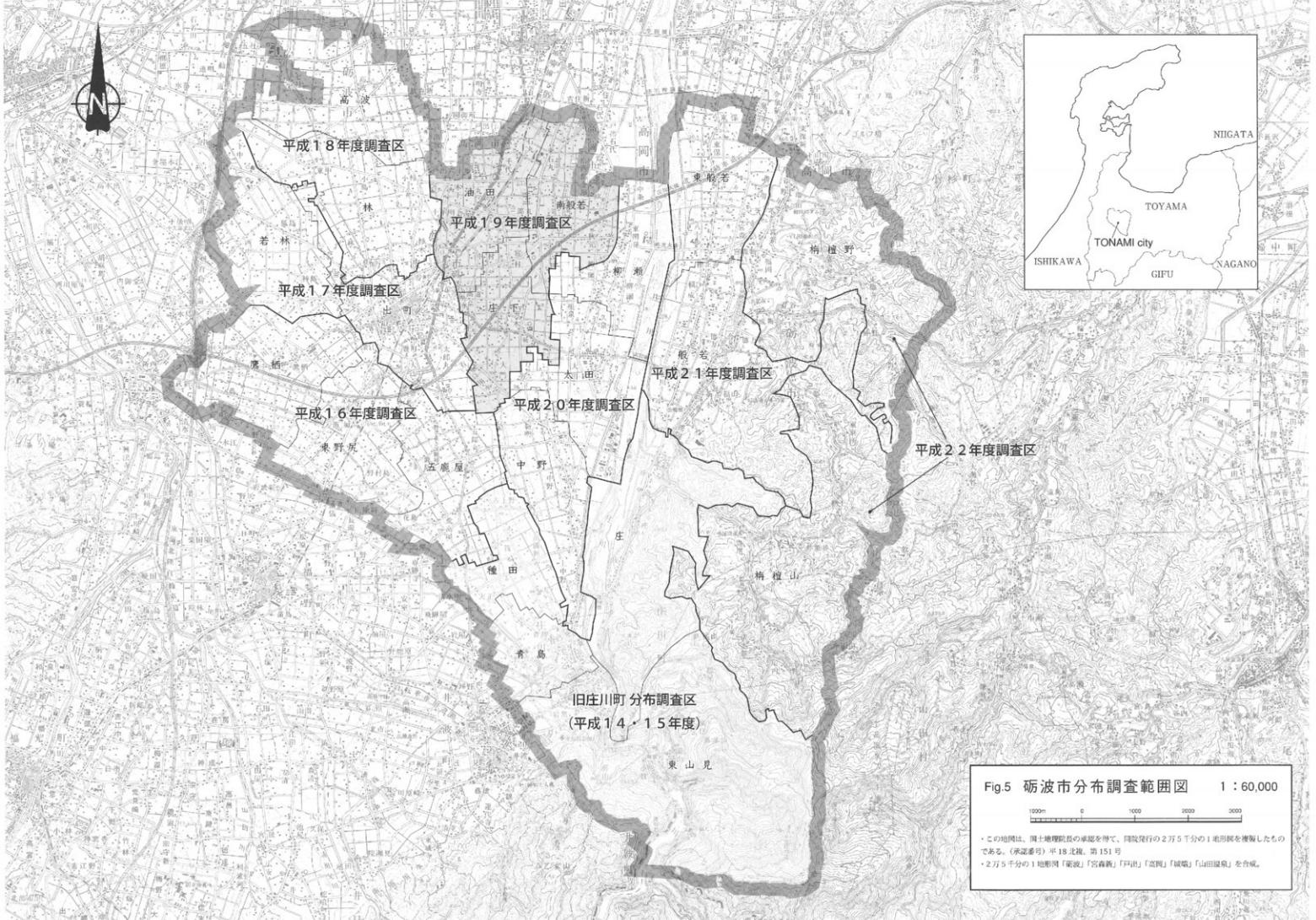


Fig.5 砺波市分布調査範囲図 1 : 60,000

1000m 0 1000 2000 3000

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地図を複数したものである。(承認番号) 平18北緯 第151号  
 2万5千分の1地図「砺波」「弓ヶ根」「戸出」「高岡」「城端」「山田温泉」を合成。

## 第2章 調査の成果

### 1 平成19年度調査区の概要

- 油田** 中村、木下、十代明、新义、宮丸、堀内、三郎丸、千代、石丸などから成る地区である。当地区名は、鎌倉時代から室町時代にかけて『平賀家文書』や『蔭涼軒日録』に記載のある『油田条(村)』に由来する。平野東部に展開した徳大寺家領般若野莊とともに市内の中世莊園を語る上で欠くことができない。その莊域は史料が乏しく判然としないが、旧千保川左岸の西の地域一帯を含むと考えられ、西限は新又川と推定されている。その千保川以西には中世遺跡がこれまで数箇所確認されており、中村イシナダ遺跡、堀内遺跡などが知られている。中村イシナダ遺跡では昭和44年頃の圃場整備により遺物が多く出土しており、珠洲焼、中世土師器など13～15世紀頃のものである。堀内遺跡は中世の館跡と考えられており、從前図をみると東西南北約150mの方形区割が確認できる。水田からは15世紀頃の珠洲焼の壺または甕の脛部片が出土している。中世莊園に先行する奈良・平安時代の遺跡も見つかっている。早くから存在が知られる千代遺跡は、昭和37年の電線架設工事中に地下2mから須恵器や土師器が発見されている。油田大坪遺跡からも同様の遺物が出土しているが、両遺跡とも表土下に黒色有機質上、いわゆるマッドが堆積しており、扇状地上にあって安定した土地であったことから古代の開発が進んだものと理解できる。
- 南般若** 秋元、千保、大窪、東石丸などから成る地区である。千保は旧千保川の河道となっていた地域で、遺跡の希薄な地帯である。大窪は常福寺に国指定重要文化財の木造阿弥陀如来立像があるが、近世初めに千保川が庵川地になったのち、その分流跡を開拓した村である。東石丸も近世以降に拓かれた村であり、中世より古い歴史が残るのは秋元だけである。秋元は千保川の右岸にあたる地域で、中世般若野莊の西端に位置する。秋元に北隣する高岡市の西部金屋集落には室町時代初めの正長元年（1428）に金屋談義所があり、また永享7年（1435）には真言宗崇福寺があつて般若野莊北部の拠点となっていたことが知られる。昭和35年の堂川改修工事において14世紀前半の板碑が山上しており、法泉寺に安置されている。秋元窪田島遺跡は地区を北流する堂川の右岸にあり、東部保育所建設に伴う発掘調査によって8世紀及び15世紀の遺構・遺物が検出されている。
- 庄下** 大門、矢木、宮村、高道、坪内などから成る地区である。中世油田条の南域にあたる地域であり、古代から中世の遺跡が点在する。中世は高道向島遺跡や大門遺跡、庄下館が知られる。高道向島遺跡は平成10年に発掘が行なわれ、鉄刀をはじめとする13世紀前半の遺物とともに掘立柱建物などが検出された。大門遺跡では宅地から15世紀後半の中世土師器が2点出土している。遺跡の上では中世よりも古代に帰属するものが多い。八咫壺神社遺跡、高道遺跡、宮村遺跡に続く南北に細長いマッドに展開した遺跡と考えられ、8世紀中頃から急速に進展した平野の開拓に伴い成立した集落跡と考えられる。

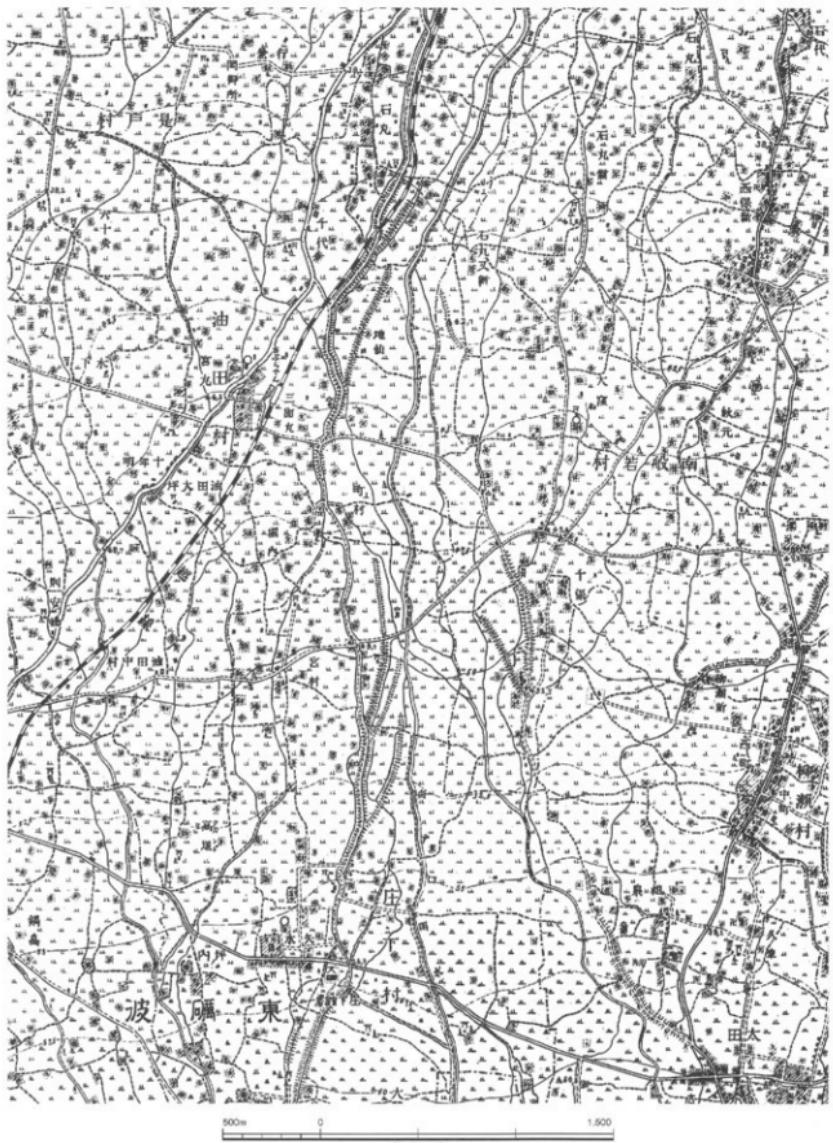


Fig.6 調査区周辺の旧版地図

この地図は、国土地理院の承認を得て、同院発行の2万5千分の1旧版地図を複製したものである。(承認番号) 平18北復、第151号

## 2 採集遺物

**遺物構成** 採集遺物の時期別点数は、古代 2 点、中世 8 点、近世 40 点、近代・時期不明 232 点、合計 282 点である。種類は、須恵器、中世土師器、珠洲、越中瀬戸、陶磁器等で構成される。遺物割合は、古代 0.7%、中世 2.8%、近世 14.2%、近代 82.3%となる。

**分布状況** 油田・南般若・庄下の各地区ともに古代・中世・近世の遺物は少なかった。当地区は中世油田条の範囲にあたり、試掘調査をはじめとする諸調査や偶発的な発見によって古代から中世にかけての遺物が発見されていることから、当該期の遺物採集はある程度期待していたが、芳しい成果は得られなかった。

**遺物解説** 表採遺物が少なかったのでこれまでに偶発的に発見された遺物も図化掲載している。248 は油田大坪跡から出土したものである。248-1 は土師器の長胴釜であり、口縁部形態から 8 世紀代のものと考えられる。内外面に搔き目が施され、頸部内面に縱方向の刷毛目が残る。248-2 は須恵器の無台杯で、口径 11.5cm を測る。8 世紀後半と思われる。248-3 は須恵器の短頸壺の胴部片である。肩の稜線が明瞭であるので 8 世紀末から 9 世紀初頭にかけての年代を与える。251 は中村イシナダ遺跡から出土したものである。251-1 は底部に糸切り痕のある土師器の皿である。251-2～5 の 4 点は遺存状態の良好な中世土師器皿である。外面に強い撫でがめぐり、その撫でに沿って指頭圧痕が残る。口径 8 cm 前後の小型皿で、底部は丸く仕上げる。251-6 は珠洲の擂鉢である。放射状に押し目が施されているが、底部内面は使用により摩滅が激しい。251-7 は片口鉢であり、口縁部に波状文が施されている。251-8 は唐津の碗底部である。251-9 は瓦質土器であるが器種は不明。外面に亀甲形の文様がある。251-10 は 251-9 と同一個体と考えられる。

209 は両面に撫でを施した須恵器片である。226 は須恵器皿の口縁部だが、高台の有無は不明である。240・99・164 は須恵器の腹胴部と思われる破片で、外面に叩き目、内面に当て具痕が残る。器壁が薄いので小振りの壺と思われる。225 は古代の上師器椀の底部で、外面に「キ」のような墨書きが残るが字全体は不明である。240 は中世土師器の皿で、口径約 7cm の小型皿である。内外面に撫でを施し、外面に強い撫で痕が残る。10・204・21・221・228 は珠洲の腹胴部である。いずれも外面に平行叩き目が残る。時期は特定できない。161 は珠洲の鉢類の口縁部である。41 は越中瀬戸の皿である。147 は越中瀬戸の皿で、内面に印花文がある。158 は越中瀬戸の碗の口縁部である。153 は肥前系とみられる磁器の碗で、底部内面にコンニャク印判が施されている。184 は磁器碗の高台部分である。10 は近世磁器の紅皿である。85 は、大正 11 年発行の 1 銭貨である。208 は温石と思われる石製品である。

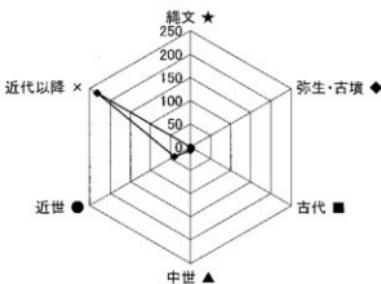


Fig.7 採集遺物の時期別点数

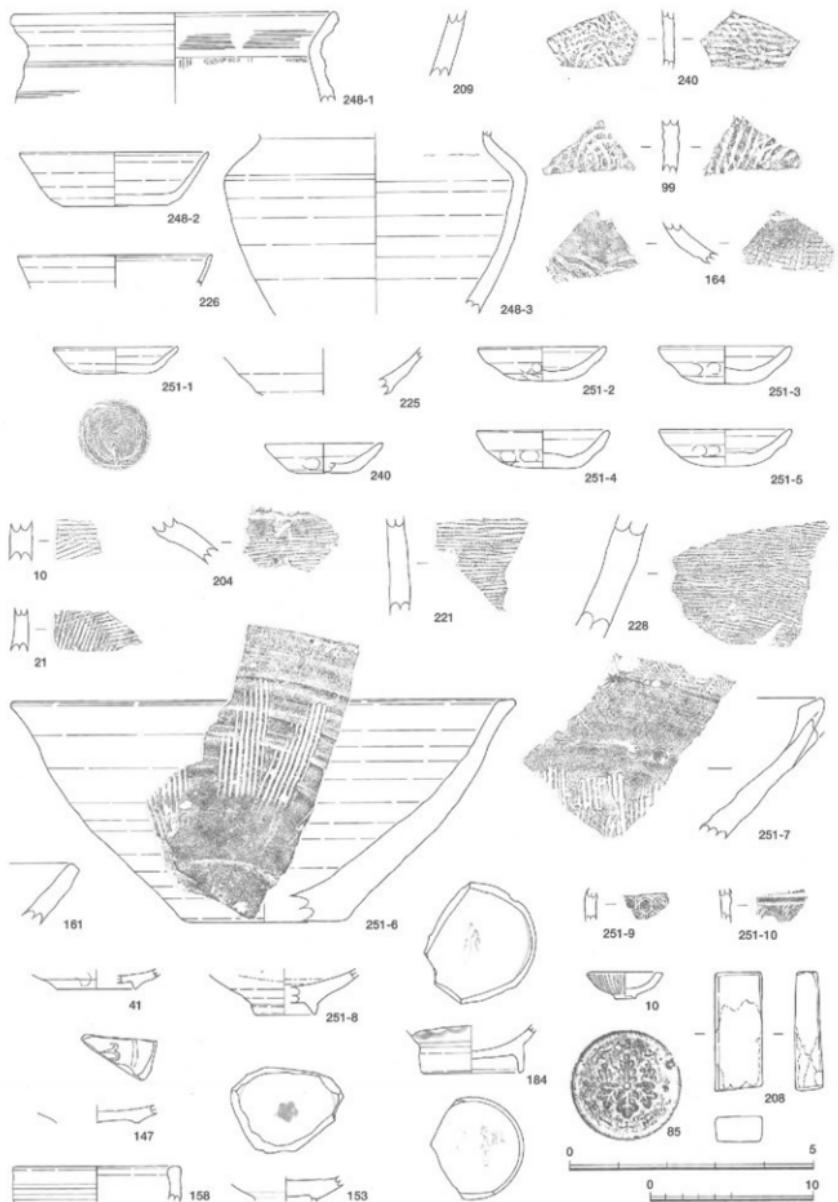


Fig.8 遺物実測図 S = 1 : 3

Tab.3 出土遺物観察表

実探番号	地区名	日付	備考	分類	器種	口径	器高	底径	備考
248-1	人坪			油田大坪	土師器	長頸釜	(20.0)	(5.5)	
209	木下	071113			須恵器			(4.0)	
248-2	大坪			油田大坪	須恵器	杯A	(11.5)	3.3	(6.4)
226	秋元	071114			須恵器	杯	11.7	(2.0)	
248-3	大坪			油田大坪	須恵器	須頬瓶		(11.0)	
240	秋元	071114			須恵器			(3.6)	
99	秋元	071115			須恵器	甕?		(3.25)	
164	高道	071107			須恵器	甕		(2.5)	
251-1	中村			油田中村	土師器	皿	7.4	1.6	3.65
225	秋元	071114			土師器	皿		(2.8)	(8.4)
251-2	中村			油田中村	土師器	皿	(7.6)	2.1	5.0
251-3	中村			油田中村	土師器	皿	7.9	2.4	5.2
240	秋元	071114			土師器	皿	(7.0)	1.8	(4.2)
251-4	中村			油田中村	土師器	皿	7.9	2.3	5.1
251-5	中村			油田中村	土師器	皿	(8.1)	2.25	(5.6)
10	矢木	071106			珠洲	甕?		(2.4)	
204	木下	071113			珠洲	甕?		(2.8)	
21	大門	071106			珠洲	甕?		(2.6)	
221	東石丸	071114			珠洲			(6.1)	
228	秋元	071114			珠洲	甕		(6.5)	
161	高道	071107			珠洲	鉢		(3.7)	
251-6	中村			油田中村	珠洲	擂鉢	(30.8)	13.6	(10.2)
251-7	中村			油田中村	珠洲	擂鉢		(8.6)	
41	中村	071108			越中瀬戸	皿		(1.2)	(4.8)
251-8	中村			油田中村	唐津	碗		(2.8)	(3.6)
147	坪内	071106			越中瀬戸	皿		(1.1)	(5.0)
158	中村	071107			越中瀬戸		(9.3)	(2.2)	
153	坪内	071106			磁器	碗		(1.5)	
184	三郎丸	071108			磁器	碗		(2.9)	(5.9)
251-9	中村			油田中村	瓦質土器			(1.9)	
251-10	中村			油田中村	瓦質土器			(2.1)	
10	矢木	071106			近世磁器	紅皿	4.0	1.6	(3.0)
85	右丸	081113			銭貨				
208	木下	071113			石製品	不明	長径(8.25)	短径2.85	厚さ1.7
36	宮村	071107			越中瀬戸	皿		(1.6)	
196	木下	071113			土師器	皿	(4.4)	1.6	3.75
210	木下	071113			越中瀬戸	皿		(1.5)	
251	中村			油田中村	土師器	皿	7.6	1.55	4.5
251	中村			油田中村	土師器	皿	7.6	2.2	5.05
251	中村			油田中村	土師器	皿	8.1	2.4	3.0
251	中村			油田中村	土師器	皿	7.7	2.2	5.2
251	中村			油田中村	土師器	皿	7.8	2.2	5.1
251	中村			油田中村	瓦質土器			(2.9)	

大正11年の1錢

銀石か?

Tab.4 中世石造物一覧

## 宝篋印塔

番号	地図	名称	所在地	地幅・状態	基(高さ)	笠(幅)	石質	備考	時期(古史)
H06	554f	光道寺塔	南院若・秋元・光道寺	半のみ残火	21	40	麻耶青	誕生の後ろにあり、一體併て造りは被である。	室町期

## 五輪塔

番号	地図	名称	所在地	個体数(以史)	内に鉢底切削された数	調査	時期(古史)
G01	554f	光悟寺五輪塔	南院若・秋元・光悟寺裏	空風輪101、火輪106、水輪45、石五輪1	墳地内複数個で、不明分は船足とのこと。住職(桃井平次氏)に確認。		
G02	554i	秋元觀音堂塔	南院若・秋元・觀音堂	空風輪101		古治公長(伊賀源氏領)立会いの下、船井寺火災に罹難。觀音堂を上上げた際に座下に安置したとのこと。	
G03	554e	上庄院竹塔	南院若・千代・上庄院	火輪1		空風輪は板に沿めてしたもの	
G11	88f	光永院一燈院知母塔	庄下・大門・末永院一燈院	火輪1		現在お祀り不休とのこと。	
G12	89f	坪内共圓院塔	庄下・坪内・共圓院	空風輪1		確認止水す	
G13	74i	次木古川靈廟地蔵	庄下・次木・共同墓地	空風輪2、火輪2、水輪3		火輪?×1あり	
G14	51f	吉園別院毛唐	庄下・當村・吉園別院明照	空風輪1			
G15	60i	宮村山古靈地蔵	庄下・宮村・共同墓地	空風輪1、火輪1、水輪1		火の上に空風輪。	
G16	29f	神明社境内御所	神田・木下・神明町以東(内側)	空風輪1、水輪1		室内(縁側に附し)に安置。	
G17	20f	西院義高院無知院	猪目・代々・西院義高院無知院	空風輪2		「西院、氏は先代で、現在は「無空」氏。	
G18	50f	三郎丸・共圓院地蔵	猪目・三郎丸・共圓院	空風輪208、水輪100		毎治公長(伊賀源氏領)、茂林の「山本復讐隊」に罹難。靈地蔵碑に記載されたとのことです。	
G19	49f	斯又古川靈地蔵	猪目・斯又・共圓院	空風輪211		墓地内瓦礫山に1点廻設したのみ。複数は所在不明。	
G20	49f	神明寺跡東北土塁裏	猪目・船井・和洋社東大字寺	空風輪1		丸太柱に安置。	

## 般若塔(表記)

番号	地図	名称	所在地	高さ	幅	石室	丹絵	特別・備考	時期(古史)
H102	83f	法泉寺塔	南院若・秋元・法泉寺	90	40	安山岩	無		鎌倉式

## 石仏 6に脚影できなかったもの

番号	地図	寺名	所在地	姿勢	高さ	幅	石質	備考	時期(古史)
S119	554i	如意院仏	御殿若・秋元・如意院 *	坐浮	29	26	妙音質	如意院(深川伊佐氏)立会いの下、桃井平次氏に確認。觀音堂を上上げした際に座下に安置したとのこと。	南北朝一家可
S120	554i	如意院仏	御殿若・秋元・如意院 *	坐浮	39	25	妙音質	如意院(伊佐源氏領)立会いの下、桃井平次氏に確認。觀音堂を上上げた際に座下に安置したとのこと。	南北朝一家可
S121	554f	如意院仏	南院若・千代・如意院	坐浮	39	22	妙音質		南北朝一家可
S124	67f	如意院仏	庄下・内澤・如意院寺宅前	坐浮	29	26	妙音質	模倣お祀りは不休とのこと。	南北朝一家可

## 五輪塔(聚頭確認)

番号	地図	名称	所在地	個体数	備考	時期
G10	33f	豊光院寺塔	庄下・豊村・豊光院寺	空風×1		
G11	23f	釋迦院光塔	庄下・宮村・釋迦院光	空風×1火×1	「古代七兵衛之高 空葉せ年七月二十日」	
G12	20f	円満寺塔	猪目・円満・円満寺	火×?×1	墨書き少なく、読みもつかない	
G13	21f	石舟山比叡塔	猪目・永丸・共圓院	火?×1		





### 3 遺跡各説

遺 跡 名	秋元窪田島遺跡 [範囲変更]	遺 蹤 番 号	208072	地 図	NJ531211
所 在 地	砺波市秋元字窪田島	現 況	水田・宅地		
種 別	古代散布地・中世集落・近世散布地	時 代	古代・中世・近世		
遺 物 番 号	225 ~ 228.240.250				
包 藏 地	市立東部保育所建設時に本調査が行われた遺跡で、堂川の右岸に位置している。奈良・平安時代にあたる8世紀と中世の15世紀に中心があり、今回の踏査でも古代・中世の遺物が採集されている。228は中世土師器の皿である。本調査の場所は、久泉遺跡から続く微高地と法泉寺や速恩寺がのる微高地に挟まれたところである。マッドがのる微高地上にも遺跡が広がると思われること、そして八幡神社付近で中世土師器が採集されたことから、包藏地の範囲を西側に拡大するものである。				
調 査 歴	本調査(H1)、試掘調査				
文 献	砺波市教育委員会『1990『秋元遺跡発掘調査報告書—市立東部保育所建設に先立つ緊急発掘調査』』				

遺 跡 名	千代遺跡 [変更なし]	遺 蹤 番 号	208078	地 図	NJ531211
所 在 地	砺波市千代	現 況	水田・宅地		
種 別	散布地	時 代	古代		
遺 物 番 号	76 ~ 79.214.				
包 藏 地	南北に長いマッド上にある遺跡である。昭和37年、電話線架設工事中に地下約2mの深さから須恵器や土師器が発見された。過去の試掘調査において、奈良・平安時代、中世の遺物が確認されている。今回の表面調査では遺物を採集することができなかったが、試掘調査で把握される状況から、包藏地範囲の変更是行なわないものとする。				
調 査 歴	本調査(S32)、試掘調査				
文 献	なし				

遺 跡 名	木下遺跡 [新規]	遺 蹤 番 号	一	地 図	NJ531211
所 在 地	砺波市木下	現 況	水田・宅地		
種 別	散布地	時 代	古代・中世		
遺 物 番 号	196.197.205.209				
包 藏 地	南北に長いマッド上にあり、中世石造物もあることから包藏地として認定する。				
認 定					
調 査 歴	なし				
文 献	なし				

遺跡名	油田大坪遺跡	〔変更なし〕	遺跡番号	208079	地図	NJ531211
所在地	砺波市三郎丸	現況	水田・宅地			
種別	散布地	時代	古代			
遺物番号	248					
包蔵地	今回の踏査では遺物は採集できなかったが、昭和41年に自動車工場の建設現場から占代遺物					
認定	が出土しているので図化掲載している。包蔵地の範囲は小さなものであるが、マッドにもの らす、周辺から遺物も採集されていないので包蔵地を拡大する要素はない。					
調査歴	なし					
文献	なし					

遺跡名	堀内遺跡	〔変更なし〕	遺跡番号	208080	地図	NJ531211
所在地	砺波市堀内	現況	水田・宅地			
種別	中世城館	時代	中世			
遺物番号	一					
包蔵地	南北に長いマッド上にある遺跡で、中世の城館跡と考えられている。今回の踏査では遺物が					
認定	採集されなかったが、遺跡南の水田中から耕作中によく土器が出土することがあるといわれ ており、須恵器壺胴部や双耳瓶、珠洲の壺胴部片が採集されている。明治8年の地引図に南北に長い矩形の区画が認められることから、範囲変更はしないものとする。					
調査歴	なし					
文献	なし					

遺跡名	宮村遺跡	〔変更なし〕	遺跡番号	208081	地図	NJ531211
所在地	砺波市宮村	現況	水田・宅地			
種別	散布地	時代	古代			
遺物番号	38					
包蔵地	堀内遺跡、中村イシナダ遺跡と同じマッド上に位置する遺跡である。古代の散布地となって					
認定	いるが今回は当該期の遺物は採集されていない。宮村の日吉神社には須恵器の杯が額に入れ て掲げられており、「當社本堂再建乃節 地より穴より里 調器出候ゆへ 近來耳珍敷名器た 留に依而神前に献上 嘉永二酉卯月」との墨書きが記されている。須恵器は8世紀後半頃とみ られる。包蔵地を拡大する要素がないため、変更なしとする。					
調査歴	なし					
文献	なし					

---

遺跡名 中村イシナダ東遺跡〔登録抹消〕遺跡番号 208082 地図 NJ531211

所在地 研波市宮村 現況 水田・宅地

種別 散布地 時代 古代・中世

遺物番号 一

包蔵地 中村イシナダ遺跡に統合するため、登録を抹消する。

認定

調査歴 なし

文献 なし

---

遺跡名 中村イシナダ遺跡〔範囲変更〕遺跡番号 208083 地図 NJ531211

所在地 研波市宮村 現況 水田・宅地

種別 散布地 時代 古代・中世

遺物番号 31.37.43.251

包蔵地 堀内遺跡、宮村遺跡と同じマッド上に位置する遺跡である。周辺からは中世の五輪塔が2箇所確認されている。かつて遺物が多く出土しており、中世土師器、珠洲、瓦質土器、越中瀬戸がある。その遺物は市史にも掲載されているが、再度国化掲載した。遺物の出土量から周辺に包蔵地が広がる可能性があり、マッドの縁辺に位置することから、中村イシナダ東遺跡を包括する範囲で包蔵地を拡大することにする。

調査歴 なし

文献 なし

---

遺跡名 高道遺跡〔範囲変更〕 遺跡番号 208084 地図 NJ531211

所在地 研波市高道 現況 水田・宅地

種別 散布地 時代 古代・中世

遺物番号 159～168

包蔵地 南北に長いマッドが切れる部分に位置しているが、古代・中世の散布地として知られる遺跡

認定 である。今回の踏査では須恵器、珠洲の破片を採集している。昭和41年に庄下地区圃場整備工事により多くの遺物が発見されている。須恵器では杯蓋、無台杯、甕、瓶、珠洲では擂鉢と壺がある。高道大島遺跡では古代の遺物が出土しており、高道遺跡と同一の可能性が考えられるため、両遺跡を包括する範囲で包蔵地を拡大する。

調査歴 なし

文献 なし

遺跡名 花総合センター内遺跡〔変更なし〕 遺跡番号 208085 地図 NJ531211

所在地 磯波市高道 現況 水田・宅地  
種別 敷布地 時代 繩文・奈良・平安・中世  
遺物番号 171  
包蔵地 南で高道向島遺跡に接し、高道向島遺跡・八咫壇神社遺跡・庄下館跡と同一のマッドにのる  
認定 遺跡である。遺物も採集されず、南には高道向島遺跡が広がることから、範囲拡大はしないものとする。  
調査歴 試掘調査  
文献 なし

遺跡名 庄下館跡〔変更なし〕 遺跡番号 208086 地図 NJ531211

所在地 磯波市矢木・坪内 現況 水田・宅地  
種別 中世城館 時代 中世  
遺物番号 124.125.129.131  
包蔵地 高道向島遺跡・八咫壇神社遺跡・花総合センター内遺跡と同一のマッド上に位置する遺跡で  
認定 ある。その名称から中世もしくは近世の館跡と考えられるが、詳細を記す史料はない。明治  
44年の旧版図に「庄下館」とあるが、その存在を示す地割があったかは定かではない。包蔵  
地内には五輪塔が確認されたが、近世遺物以外はないため、包蔵地に関する変更はないもの  
とする。  
調査歴 試掘調査  
文献 なし

遺跡名 大門遺跡〔変更なし〕 遺跡番号 208087 地図 NJ531211

所在地 磯波市大門 現況 水田・宅地  
種別 敷布地 時代 中世  
遺物番号 122  
包蔵地 北西方向に伸びるマッドの縁辺部に位置している遺跡である。今回の踏査において遺物の採  
認定 采集はなかったが、昭和39年頃、民家から中世土師器が2点出土している。口径7.7cm、器高  
1.5cmの上師器皿は、15世紀後半頃に比定できるものである。地形状況も勘案し、包蔵地に  
変更はないものと判断する。  
調査歴 なし  
文献 なし

遺跡名	八咫玉神社遺跡〔変更なし〕	遺跡番号	208113	地図	NJ531211
所在地	砺波市矢木	現況	水田・宅地		
種別	散布地	時代	中世		
遺物番号	11				
包蔵地	高道向島遺跡・花総合センター内・庄下館跡と同一のマッドのほぼ中央部に位置する遺跡である。				
認定	ある。国道359号砺波東バイパスの建設時の試掘調査において確認された。包蔵地内における遺物の採集ではなく、地形的に包蔵地の広がりを把握できる状況にないため、範囲等の変更はしないものとする。				
調査歴	試掘調査				
文献	なし				

遺跡名	高道向島遺跡〔範囲変更〕	遺跡番号	208115	地図	NJ531211
所在地	砺波市高道・矢木	現況	水田・宅地		
種別	集落	時代	古代・中世		
遺物番号	148～150.170				
包蔵地	花総合センター内遺跡・八咫玉神社遺跡・庄下館跡と同一のマッド上に位置する遺跡である。				
認定	平成10年に国道359号砺波東バイパスの建設に先立ち発掘調査が実施された。古代・中世、近世の3時期の遺構・遺物を検出しているが、遺構は中世が主体を占め、掘立柱建物・炭焼窯・墓、溝、柱穴、ピット等がある。遺物は、十師器、須恵器、珠洲、青磁、白磁、鉄製品で構成され、8世紀後半と13世紀前半の2時期に大別される。SK35からは土師器、珠洲甕と共に刃部長19cmを測る短刀も出土している。古代の内容が貧弱であるため評価は難しいが柱穴を検出していることから、奈良時代における扇状地開発に関連する集落の可能性が高く、それまで芹谷野段丘根での官森新北島I遺跡の奈良時代後半の2×3間の掘立柱建物に次ぐ成果として注目された。中世においては、平賀家領油田条の南城に位置するが、文献史料の初現となる14世紀後半よりや古く中世莊園の開発に先行する集落と推察される。近年の試掘調査結果から包蔵地が南に広がることを確認しているため、範囲を南に拡大する。				
調査歴	本調査(H10)、試掘調査				
文献	砺波市教育委員会 1999『高道向島遺跡』				

遺 跡 名 高道大島遺跡たかんじよおおしま [登録抹消] 遺 跡 番 号 208120 地 図 NJ531211

所 在 地 研波市高道 現 況 水田・宅地

種 別 散布地 時 代 古代・中世

遺 物 番 号 159 ~ 168

包 藏 地 高道遺跡に統合するため、登録を抹消する。

認 定

調 査 歴 なし

文 献 なし

### 第3章 まとめ

**調査所見** 今年度調査区は中世平賀家領油田条のある油田地区をはじめ、庄下地区には高道向島遺跡、南般若地区には秋元窟田島遺跡と発掘調査が行なわれた遺跡のある地区的ため、潜在している遺跡が多いと見込んでいた。南北に継断する千保川の河道は予想をはるかに上回る遺物の希薄さで、改めて松川除堤防築堤によって施川地となった状況を実感することができた。

結果として今年度調査区は既知の遺跡が多い割に古代・中世に属する遺物の採集はごくわずかであった。圃場整備も影響しているだろうが、やはり古代遺構面が深いため、遺物が表面に出てきていらないものと思われる。特に大門遺跡を頂部として高道向島遺跡や中村イシナダ遺跡、千代遺跡まで連続と続くマップ上には万遍なく遺跡が存在するわけであり、「表採遺物がない=遺跡が希薄」と即断はできない。遺物の情報から油田条に関する要素を抽出しようと思っていたが、内容が貧弱のため困難である。しかし、先述した南北のマップ群には遺跡と中世石造物の分布範囲が重なる部分も多く、油田条の範囲推定に大きな手がかりを得たよう思う。

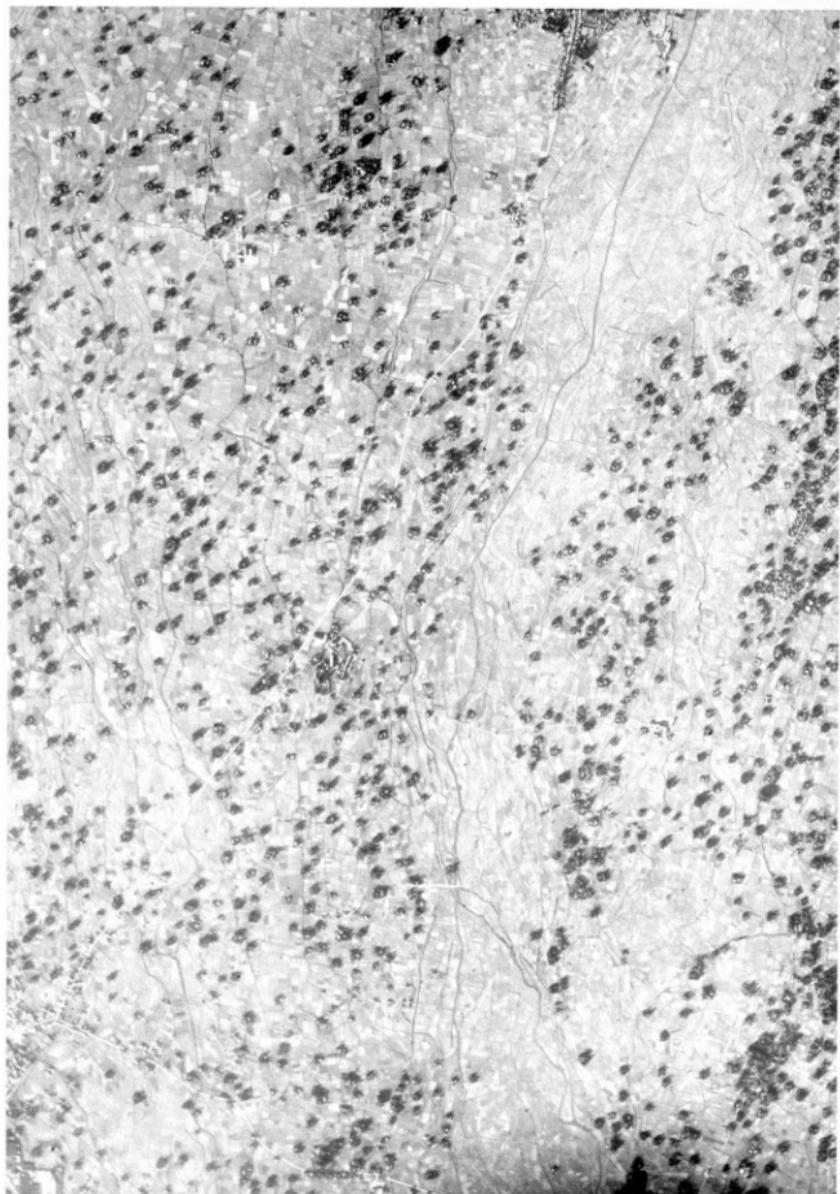
Tab.7 調査遺跡一覧

	遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	摘要
1	208072	秋元窟田島遺跡	砺波市秋元字窟田島	古代・中世・近世	範囲変更
2	208078	千代遺跡	砺波市千代	古代	変更なし
3	—	木下遺跡	砺波市木下	古代・中世	新規
4	208079	油田大坪遺跡	砺波市三郎丸	古代	変更なし
5	208080	堀内遺跡	砺波市堀内	中世	変更なし
6	208081	宮村遺跡	砺波市宮村	古代	変更なし
7	208082	中村イシナダ東遺跡	砺波市宮村	古代・中世	登録抹消
8	208083	中村イシナダ遺跡	砺波市宮村	古代・中世	範囲変更
9	208084	高道遺跡	砺波市高道	古代・中世	範囲変更
10	208085	花総合センター内遺跡	砺波市高道	縄文・奈良・平安・中世	変更なし
11	208086	庄下塙跡	砺波市矢木・坪内	中世	変更なし
12	208087	大門遺跡	砺波市大門	中世	変更なし
13	208113	八咫鏡神社遺跡	砺波市矢木	中世	変更なし
14	208115	高道向島遺跡	砺波市高道・矢木	古代・中世	範囲変更
15	208120	高道大島遺跡	砺波市高道	古代・中世	登録抹消

\*新規1遺跡、範囲変更4遺跡、登録抹消2遺跡

## 参考文献

- 有間正一郎他編 2001 「歴史地理調査ハンドブック」 古今書院
- 犬伏和之・安西徹郎編 2001 「土壤学概論」 朝倉書店
- 大垣市教育委員会文化部 1997 「大垣市遺跡詳細分布調査報告書 解説編」
- 神島利夫 1982 「地形地質」『地下水利用等基礎調査報告書』 富山県
- 鈴木隆介 1998 「建設技術者のための地形図読図入門 第2巻 低地」 古今書院
- 高橋 学 2003 「平野の環境考古学」 古今書院
- 竹村利夫 1978 「砺波平野南部地域の段丘地形」『地理学評論』 vol.51-9
- 地学団体研究会編 1994 「新版地学教育講座 9 地表環境の地学—地形と土壤—」 東海大学出版会
- 砺波市・砺波市土地改良協会 1985 「砺波市ほ場整備完成記念誌」
- 砺波市史編纂委員会 1990 「砺波市史資料編 1 考古 古代・中世」  
1996 「砺波市史資料編 5 集落」
- 富山県農地林務部ほ場整備課 1981 「土地分類基本調査 城端」  
1970 「土地分類基本調査 石動」
- 外山秀一 1997 「プラント・オバールからみた砺波平野の土地利用と黒土層の特性」  
『砺波散村地域研究所研究紀要第13号』砺波市立砺波散村地域研究所
- 久間一剛他編 1993 「土壤の事典」 朝倉書店
- 深井三郎 1976 「富山の地形と地質」 富山県自然保護課



この写真は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真（昭和24年）を複製したものである。（承認番号）平-18北極、第151号

PL.2 空中写真（2）



この写真は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真（平成14年）を複製したものである。（承認番号）平18北緯、第151号

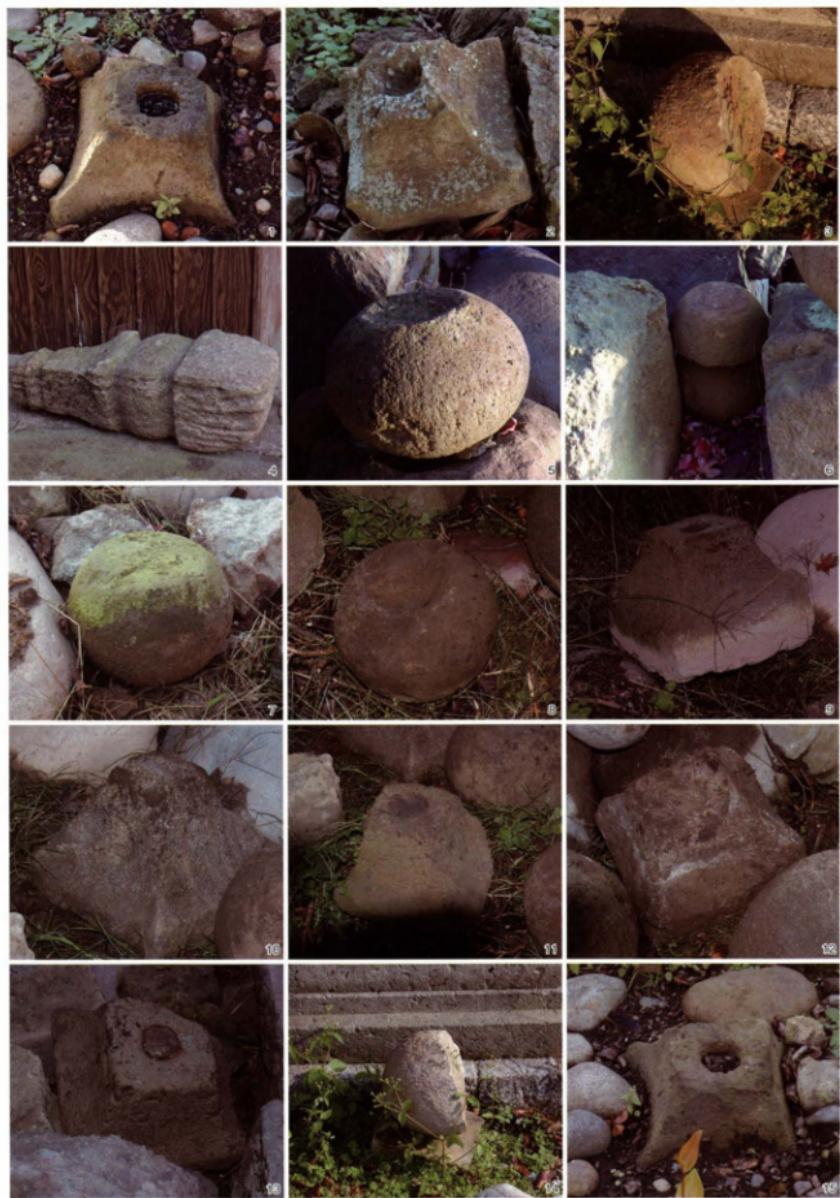


1. 千代道路 2. 木下道路 3. 油田大坪道路 4. 堀内道路  
5. 宮村道路 6. 中村イシナダ道路 7. 高道道路 8. 花総合センター内道路

PL.4 調査写真 (2)

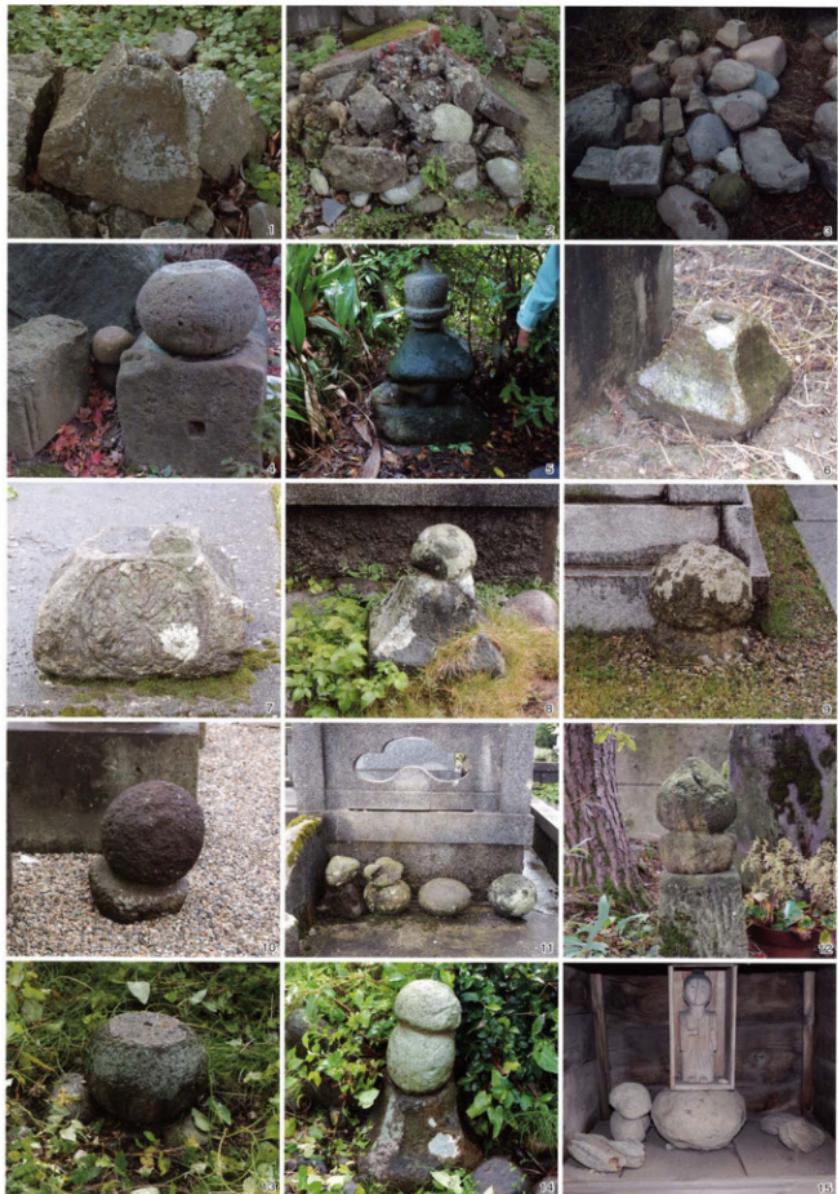


1.高道向島遺跡 2.八咫吉神社遺跡 3.庄下館跡 4.大門遺跡  
5.秋元宿田島遺跡 6.安藤家（十村）の田門 7.安藤家（十村）の墓 8.光福寺の宝篋印塔（H08）

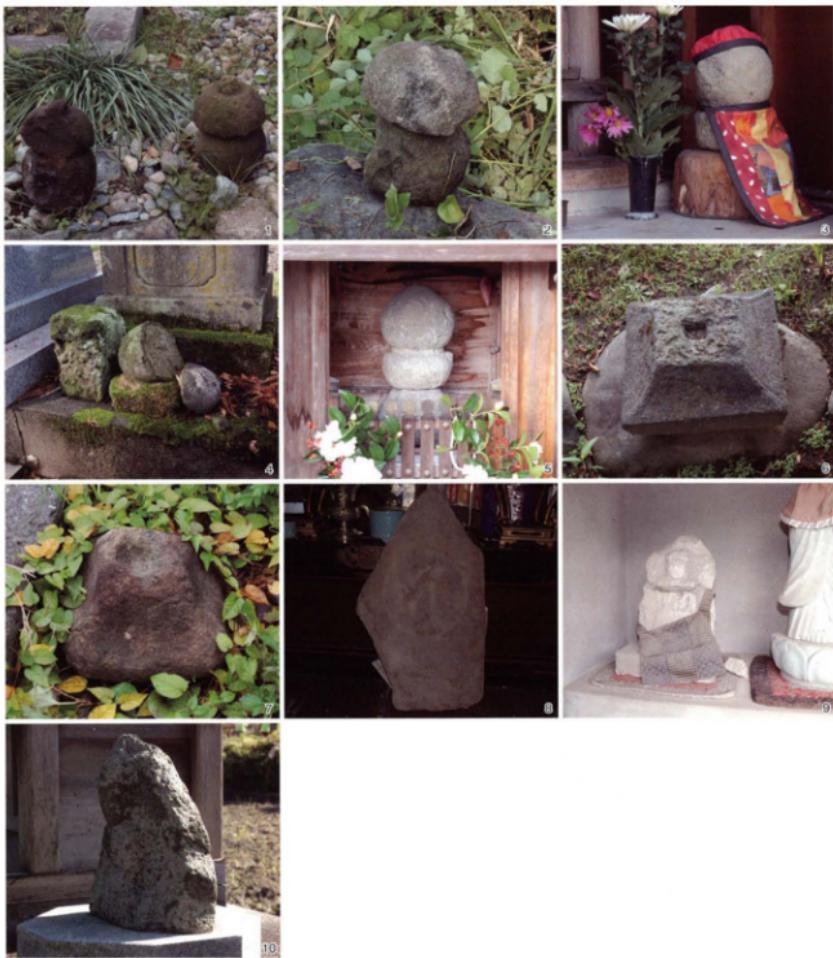


1. 光福寺の五輪塔 (G61) 2. 光福寺の五輪塔 (G61) 3. 光福寺の五輪塔 (G61)  
4. 光福寺の五輪塔 (G61) 5. 光福寺の五輪塔 (G61)  
6. 光福寺の五輪塔 (G61) 7. 光福寺の五輪塔 (G61) 8. 光福寺の五輪塔 (G61) 9. 光福寺の五輪塔 (G61)  
10. 光福寺の五輪塔 (G61) 11. 光福寺の五輪塔 (G61) 12. 光福寺の五輪塔 (G61) 13. 光福寺の五輪塔 (G61) 14. 光福寺の五輪塔 (G61)  
15. 光福寺の五輪塔 (G61)

PL.6 調査写真 (4)



1. 光福寺の五輪塔 (G61) 2. 光福寺の五輪塔 (G61) 3. 光福寺の五輪塔 (G61) 4. 光福寺の五輪塔 (G61) 5. 上田隆一宅の五輪塔 (G63) 6. 末永俊一宅の五輪塔 (G71)  
7. 矢木共同墓地の五輪塔 (G73) 8. 矢木共同墓地の五輪塔 (G73) 9. 矢木共同墓地の五輪塔 (G73) 10. 矢木共同墓地の五輪塔 (G73) 11. 矢木共同墓地の五輪塔 (G73)  
12. 吉岡祐明宅の五輪塔 (G74) 13. 吉村共同墓地の五輪塔 (G75) 14. 吉村共同墓地の五輪塔 (G75) 15. 神明社境内の五輪塔 (G85)



1. 西尾義寛宅の五輪塔 (G86)      2. 新又共同墓地の五輪塔 (G88)      3. 神明神社東太子堂の五輪塔 (G89)  
 4. 景完教寺の五輪塔 (G90)      5. 津崎弘宅の五輪塔 (G91)      6. 円満寺の五輪塔 (G92)      7. 石丸共同墓地の五輪塔 (G93)  
 8. 法泉寺の板石塔婆 (I102)      9. 千保地藏堂の石仏 (S121)      10. 渡辺富造宅の石仏 (S124)

PL.8 遺物写真（1）



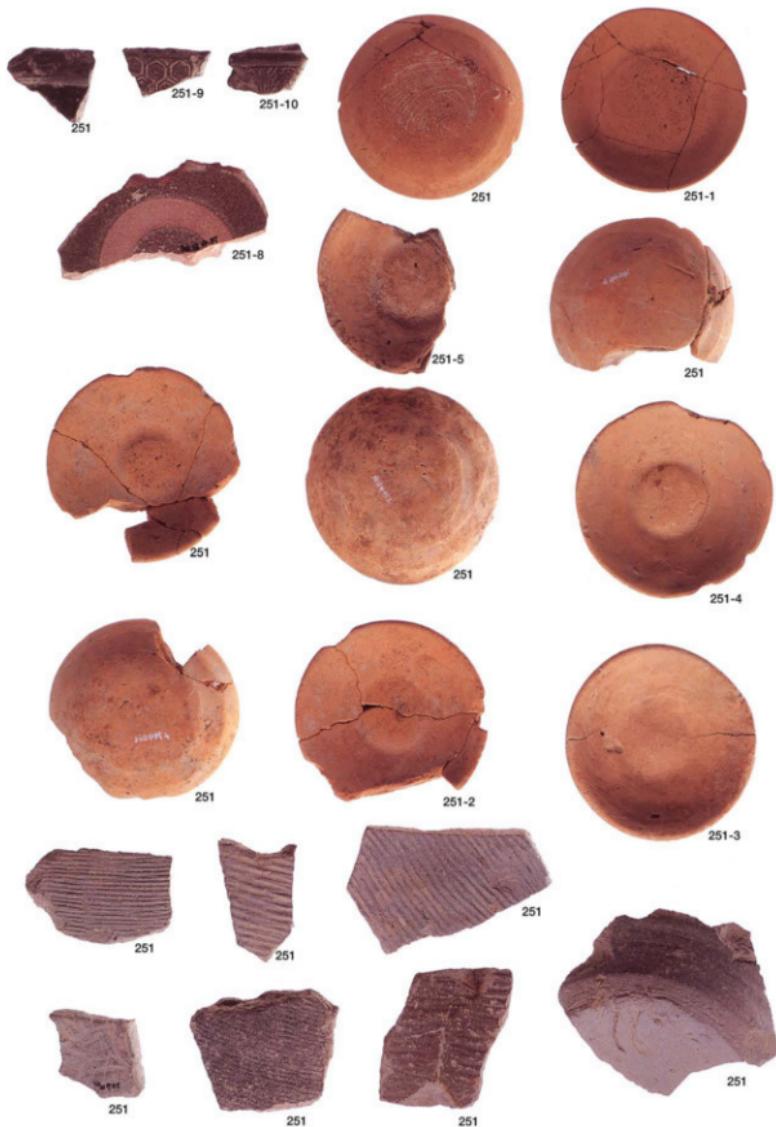


PL.10 遺物写真 (3)





PL.12 遺物写真 (5)



# 報告書抄録

ふりがな	となみしいせきしうさいぶんぶちょうさうこく よん						
書名	砺波市遺跡詳細分布調査報告4						
副題	油田・南般若・庄下						
編著者名	野原大輔（砺波市教育委員会生涯学習課）						
編集・発行機関	砺波市教育委員会						
所在地	〒932-0393 富山県砺波市庄川町青島401番地 TEL0763-82-1904						
発行年月日	平成20年3月26日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査原因	
しない いせき	と平安けんとなみしなかむら、きのした、じゅうねんみょう、あらまた、みやま、ほりのうち、さぶろうまる、せんだい、いしまる、あきもと、せんば、おおくば、ひがしいしまる、おおかど、かぎ、みやむら、たかんど、つばのうり	162086	—	36度39分5秒	137度2分52秒		市内遺跡詳細 分布調査事業
市内遺跡	高山県砺波市中村、木下、下原、新义、吉丸、城内、二郎丸、千代、石丸、秋元、千坂、大森、山石丸、大門、矢木、宮村、高瀬、坪内			調査面積	調査期間		
				—	2007.11.5～ 2007.11.16		
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
市内遺跡	—	—	—	—			
秋山遺跡	古代散布地・中世集落・近世散布地	古代・中世・近世	—	—			
千代遺跡	散布地	古代	—	—			
木下遺跡	散布地	古代・中世	—	—			
山口大門遺跡	散布地	古代	—	—			
高瀬遺跡	中世城郭	中世	—	—			
宮村遺跡	散布地	古代	—	—			
中村イナガ遺跡	散布地	古代・中世	—	—			
支道跡	散布地	古代・中世	—	—			
花園合併跡	散布地	散・雜・鞍・寺	—	—			
川下龍跡	中世城郭	中世	—	—			
大門遺跡	散布地	中世	—	—			
八代里神社遺跡	散布地	中世	—	—			
高瀬向日遺跡	聚落	古代・中世	—	—			

# DISTRIBUTION SURVEY REPORT OF THE TONAMI CITY Vol.4

— ABURADEN · MINAMIHANNA · SHOGE —

Copyright © Tonami Prefectural Board of Education

401 Aoshima Shogawamati Tonami-City Toyama 932-0392,Japan

No parts of this publication may be reproduced or copied by any means  
without prior permission of the copyright owner.

## 砺波市遺跡詳細分布調査報告 4

—油田・南般若・庄下—

2008年3月26日発行

編集 砧波市教育委員会

〒932-0393 富山県砺波市庄川町青島 401 番地

TEL (0763) 82-1904 FAX (0763) 82-3521

発行 砧波市教育委員会

印刷 株式会社チューイツ

〒939-1308 富山県砺波市三郎丸 45 番地

TEL (0763) 32-2021 FAX (0763) 32-2720

Printed in Japan

